

世紀末の現人類は、全世界的に前例のない一大危機に直面しつつあるが、一体、誰が、何がこの危機を解決、克服しえるのだろうか。

いうまでもなく、K・E・ボウルディングが述べたように、新石器時代以来の最大の転換期に当面している。全人類は環境汚染、自然破壊によって、他の生物と共に絶滅の危機にあるのである。事の重大性を自覚し、人心緑化に努めねばならない。従って、他の生物との共存が、他の人類との協力以上に重要となる。それと共に、真の人間社会はエコロジ的共生の基礎の上に構築されるであろう。なぜならば、われわれ人類は自然の一部分であり、自然法則(原理)の枠内で生きるほかないからである。

こうして全人類(少なくとも先進諸国民)は、その生活様式を根本的に変え、食物、衣服、住宅その他の付属物は大量の生産、消費、廃棄から謙虚で簡素なものへと抑制されなければならない。それは量の文明から質の文明へ、シュウマツハの『小即美』文化への大変革を意味し、人類に健康をもたらし、現代病から解放するものである。

このような新自然文明についてはK・石原が、その方法原理として次の3つをあげている。(1)都市解体(人間皆農)(2)農工一体(兼農産業)(3)簡素生活(合理的、芸術的生活様式)これはY・メッシンガーがキブツ教育の目的として述べた健康生活であり『健康な社会における健康な人格』こそは、また人間社会の理想でもある。この理想を実現するためには、人間と自然との共生、人間と人間との協力が不可欠である。どのような協力

方式があるのか。キブツ的な、或は生産共同のモシヤウシトフィまたは協同組合村モシヤウオプデムか、それとも他の方式か。いづれにしてもエコロジ的視座を欠くならば、共同体運動への貢献も、生き残りも不可能となるであろう。日本は今や病める反自然文明に苦悩しつつあり、シュペングラーの『西欧の没落』にも似た、日本の没落が囁かれている。例えば神戸市を襲った大激震や東京都内での死の毒ガス・サリン事件な



キブツ・ゲゼルの食堂横(後列右から3人目ヤンバング氏)

ど。汚染された巨大都市や金銭万能社会への反省再考を迫られている。しかし多くのエコロジ運動も発生している。日本有機農業研究会は少なからぬ農民や、健康食を求める都市の消費者、主婦たちにも自覚を迫りつつある。大農機具、化学肥料、農薬の使用に陥りがちな反エコロジ的大農場方式(キブツでは大農場でも有機農業が営まれている)をさけて小農方式を

キブツに刺激され、報徳文化村構想を練り直す

宮城 正雄

報徳文化村構想を進めている私は、大きな期待と関心をもって出発した。百聞は一見にしかず、キブツ研修はこの村に必要な多くのものを学習でき、大きな収穫だった。

- (一)この構想は定年退職後20余年を希望にみちた有意義な村づくりを目標としている。
- (二)農を楽しみながら農地、農業を守り、天寿を全うできる生活環境を創ること
- (三)温く優しく逞しく助け合う

推進してきている。農民は地域的に協力するか、都市の消費者たちが協力して有機農家を支えるか(美斉津農場の場合)、こうした例はまだ多くはないが広がりつつある。こうして共同体運動は、その貢献、生き残りのためには「健康な地球における健康な社会」としての、もう一つのしかも唯一の道をエコロジ的協力社会に見出すほかはないであろう。」



緑陰の道(キブツ・ニルダビド)

- (一)この村の構成員の資格は、決する共同社会、理想の村をつくること
- (二)社会改革の使命観(行きつまりの農業問題をはじめ、

高齢化、都市分散、環境等村の中で小さくとも出来る世なおし」と実践力

(二)美しく老い天寿を全うする(美しい死は最高に生きた終りにくるもの)死の美学

(三)自由平等の集団生活に協調この趣旨の賛同者50〜100戸(直接民主主義の可能な)の小さな村づくりで会員募

集。第一次定住者は55〜60才で50戸。第二次は40才台の定年後の入植希望者で、セカンドハウスをかね、将来の定住に備えるもの50戸。循環方式によって農地を守る。

高度民主主義社会であるキブツを手本とし(特定のリーダーや指導階級による支配でなく)各種の問題は各委員会

で、重要問題は全員の充分な協議によって決定する。自由・平等には相反する要素があり、協力は自己抑制を要するから実践はむずかしい。村づくりには問題が山積するが、ダイナミックな議論、研究、協調により、青年の気概をもって、無理、無駄のない組織づくりが望まれる。

定住土地、借用農地、営農村構村などの諸問題を、多様な共同のモシヤブ

のキブツ、半共同のモシヤブ

など)から長所を学び、絶えざる修正、変革を重ね、具体案を製作、幾通りかの「村の構成配置図」を叩き台とし、各方面からの指導と協力をえ、賛同者の募集を進めたい。

キブツを見て強い感動を受けたように「定年後の生き方はこれだ」と一目でわかるよ

うな理想社会の見本(どこでもできる)をつくりたい。使命観があつて生き生きと足ることを知る豊かさ

一村皆家族のような楽しさ老後は互に助け合う安心

国立公園水源(温泉)地・ニルダヒド



幸せなる村

「キブツは失敗していない唯一の共同体」という興味深い話を聞き、ぜひ行ってみたいと思つた。実際に行つてみると、たしかにキブツはいろいろな面で素晴らしいシステム

キブツを訪ねて 考えたこと

橋本 宙八

を持った共同体である。イスラエルの厳しい自然環境の中で、キブツはともよく手の行き届いた生活環境を作つて

死海のそばのキブツでは、草一本もない周囲の砂漠とは対照的に、緑が溢れ、きれいな花が咲き誇り、これがオアシスかと感動した。共有、共同生活を基本とするキブツでは、われわれの社会のような衣食住獲得のための競争はない。共同で仕事を分担しているため、婦人も料理や洗濯、子育てなどの家事から解放されている。そのためか誰もが実にゆったりと生活している。特に社会の片隅に押しやられがちな日本の年寄りや、いつまでも多勢の仲間を支えられながら生活できるキブツの年寄りは、とても幸せそうに見える。車が通らず交通事故の心配もないキブツでは、子どもたちも実にのびのびと遊んでいる。飼いだの表情も柔かで、人間に対しておびえた様子が全くない。キブツの人たちが動物たちといかにもいい関係をもっているかの良い証拠で印象的だった。職業に別け隔てがなく、誰もが平等に労働に従事し、キブツの運営も見事に民主的にやられていると聴き、本当にすばらしいシステムだと感心。共同社会というものが、こんなにもゆつたりとした生活を生み出すものかと実感もした。なぜこうしたシステムが作られたのかは、キブツの歴史を知つて初めて分かつたよう

な気がする。それは単なる主義主張や理想論だけで作られたものではない。ユダヤ人が受けつけてきた長い迫害の歴史の中で、キブツの人々がいのちを賭けてこれを闘い抜き、血と汗と涙の結晶として、今こうしてキブツとして存在しているというのである。失敗していない唯一の共同体である理由も、このへんにあると思われた。その意味でキブツは、ユダヤ人の歴史が作りあげた産物だといえるだろう。

キブツの原点に

そんなキブツにも、まだまだ乗り越えるべき課題があることを知つた。滞在中に何人ものメンバーに話を聞く機会があつたが、印象に残つたのは他人と違った生き方をしてみたい、外国にも行ってみたい、経済的にもっと豊かにしたいといった思いを強くもつていたことである。こうした傾向は一部の人ではなく、多くのメンバーが抱いているもので、キブツ全体が目ざしている方向でもあるようだった。これはとても興味深いことで、豊かさへの欲求がほとんど膨らんでいくなら、やがてキブツも(以下3頁3段へ)